

Representation 概念について

以下に掲載するのは、1997年2月中旬から3月中旬にかけてメーリングリスト ECOSTAT 上で行われた REPRESENTATIN概念をめぐって行われた討論のなかで私〔山田〕にかかわったものです。ここに掲載するにあたって、幾つかの削除・変更を行いました。このメーリングリストでの討論のより原文に近いものは、古井戸さんの素晴らしいホームページ (<<http://infofarm.cc.affrc.go.jp/furu/>>) の「環境勘定用語集」のコーナーで読むことができます。REPRESENTATIN概念や唯物論・マテリアリズムについては、現在、論文を準備中ですので、この文章は、予備的な論考としてお考えください。

From 古井戸@森林総研

Wed Feb 12 23:32:21 1997

「社会統計学」の意義（佐藤博先生）、最終回です。

4. 蜷川統計学の意義

統計は、集団を物語る数字である。（ここまでは誰もが認める）しかし、「集団」概念についての認識は英米・独で異なる。

（1）2つの集団論

ドイツ：「存在たる集団」または「大量」

英米：「意識的に構成された集団」または「解析的集団」

蜷川の立場は、「存在たる集団」から大量観察法によって「解析的集団」が抽出され、この「解析的集団」英米的な統計解析法によって解析されるという風に、統一的にとらえ、大量観察法+統計解析法を「統計方法」として一括した。

（2）調査論重視（統計利用者の統計学）

「統計の信頼性批判」

抽象的概念たる「大量」を、大量観察の4要素（単位、標識、時、所）を満たすように定式化する過程に注目

「統計の正確性吟味」

ミスプリ等の技術的問題

（3）確率論の成立基盤・適用対象を、<純解析的集団>に限定 「純解析的集団」とは、

「いつ、どこで」を一切考えなくてもよい統計値の集合であって、数字がいくらでも得られ、極限値が求められるもの。ミーゼスの「コレクティブ」概念に近い。

eg.出生性比：どの国でも同じ

蜷川統計学3部作

1)統計学研究Ⅰ（岩波、1931）

2)統計利用の基本問題（岩波、1932）

3)統計学概論（旧岩波全書、1934）

ご講演は以上で、蜷川統計学の限界、といった論及はとくにありませんでしたが、討論の中で、「部門統計としての経済統計の枠組について、蜷川自身は示しておらず、大橋・野村両氏によってなされた」との言及がありました。

討論は多岐に及びましたが、1つ印象に残ったのは、標本調査のオルタナティブとしての「典型調査」（毛沢東の農村調査に適用）に触れられ、

Representation 概念について

「何をもって典型とするか、という問題があり、この点で想起される言葉は、『どこにでもいそうどこにもないもの』（ドストエフスキー『悪霊』第4篇）」

とおっしゃっていたことです。

1つ、なんとなく引っかかっていることがあります。「統計は集団を物語る数字である」と言うときの、「物語る」という概念の方は問題にならないのでしょうか。知の歴史における「表象」représentationの変遷は、フーコー『知の考古学』において議論されたところであり、また、SNAでいう「表章」représentation概念に関しても、行列形式とT型表示の選択、部門分類のあり方、生産の境界、等々、ア・プリオリには語れない問題がたくさんあるように思われます。

以上で終わります。

古井戸 宏通@森林総研．つくば

Wed Feb 12 23:32:23 1997

佐野@福井です。

> # 1つ、なんとなく引っかかっていることがあります。「統計は集団を物語る数字である」と言うときの、「物語る」という概念の方は問題にならないのでしょうか。知の歴史における「表象」représentationの変遷は、フーコー『知の考古

学』において議論されたところであり、また、SNAでいう「表章」représentation概念に関しても、行列形式とT型表示の選択、部門分類のあり方、生産の境界、等々、ア・プリオリには語れない問題がたくさんあるように思われます。

まったく気が付かない論点でした。「物語る」と「表象」と「表章」ですか。「蜷川」と「哲学」と「統計」の順ですね。

From Mitsuru Yamada @

Thu Feb 13 02:40:27 1997

représentation 概念に関して。

手元の本棚に手を伸ばせば、例えば、次のような記述に出くわします。引用文中、フランス語固有の文字表記は省略しています。

De tous les aspects de la relation entre comptabilité nationale et rapports de production, on s'est efforcé d'étudier ici, à titre principal, celui de la représentation des rapports de production dans les concepts de la comptabilité nationale française (base 1959 et 1962).
---J.-C. Delaunay: Essai marxiste sur la comptabilité nationale, Editions sociales, Paris, 1975, p.19.

あるいは、

La CN (la comptabilité nationale---Yamada) est une représentation globale, détaillée et chiffrée de l'économie nationale dans un cadre

Representation 概念について

comptable.mais il faut insister
immédiatement sur le fait que la CN est une
représentation. On entend souvent dire que la
CN est objective, qu'elle est la photographie
du réel. C'est au moins oublier que d'un même
objet il peut exister de nombreuses photos qui
diffèrent par l'éclairage, l'angle de prise de
vue, etc. C'est surtout omettre que l'objet que
la CN représente, met en scène, n'est pas déjà
là, mais est construit par la CN elle-même.

Jean-Paul Piriou: La comptabilité nationale,
nouvelle édition, coll.<Reperes 57>, Editions
La Découverte, Paris, 1991, p.4.

結局、蜷川統計学というのは、「唯物論」を自称
していながら、表象・物語り・言説の物質性を承
認できず、観念論の独断のまどろみに沈んでし
まったのだと僕は理解しています。「真の認識」
を歪める表象・物語り・言説（古い言葉を用いれ
ば、ブルジョア・イデオロギーや小ブルジョア・
イデオロギー）の存在は、「かろうじて」認めて
いるのに。

もっとも、だからといって僕は蜷川統計学の歴史
的意義を過小に評価する立場には与しません。

From 佐野 @???

Thu Feb 13 23:30:03 1997

質問 1

「表象・物語り・言説の物質性」というのは、
「人間が観念によって行動してしまうところがあ
るので、観念が物質的な力をもつ」と理解してい
いのでしょうか？

質問 2

「観念論の独断」というのは、先験的な「真の認
識」を主張することと理解していいのしょう
か？

#でも「物質」というのも、考えているうちに分
からなくなる言葉ですね。どんな定義が可能なん
でしょう？

From Mitsuru Yamada @???

Fri Feb 14 03:57:06 1997

佐野さんからの質問に答える前に、フランス語の
テキストの翻訳しておきます。長くなりますが、
粗っぽく訳せば、次のようなところです（フラン
ス語部分は英語に置き換えています）：

J.-C. Delaunay（ドローネ）のテキスト：

「国民経済計算と生産諸関係との関係の全ての面
に関して、原理的な観点から、フランス国民経済
計算の諸概念における生産諸関係の
représentation（の全ての局面）を研究しなくて
はならないであろう」（この訳は、ちょっと危な
いですね）

Delaunayは、他の箇所でも次のように書いてもいま

Representation 概念について

す：「...国民経済計算：言語活動（ランガージュ）はニュートラルではない。それは représentation の体系である。そうである限り、それは表象された（REPRESENTEDされた）対象の理論と不可分に一体化されている（フランス語で implique という動詞が使われてます）。ランガージュとその構造を唯一説明する理論と一体なのである。」山田によるコメント1：ここでは、国民経済計算を、ひとつのランガージュ、理論的言語活動として捉えるという立場が示されています。（注：ランガージュはソシール言語学の概念で、通常、ラング（言語体系）と区別されて、言語活動と訳されています。）言語活動は言語活動である限り、「物質性」を持っています。

J-P Piriouのテキスト（省略した部分も訳しておきます）：「国民経済計算は、簿記（会計）の枠内での国民経済の包括的な詳細な数字で示された表象（représentation）である。国民経済計算は表象（représentation）であるということが強調されなくてはならない。しばしば、国民経済計算は客観的であり、現実（実在THE REAL）の写真であると言われるのを聞くが、それは次のことを少なくとも忘れていて、同じ対象に関して、沢山の写真があり、それらは異なったアングル、露出（照明）によって異なることができるのである。（山田のコメント2：この論議は敵の土俵での論議で危ない；なぜなら、「ある対象が既にあり、それを見る視点が様々ある」という凡庸な見方に巻き込まれてしまうからです；そこでピリオーは次のように決定的に書き続けます。）とりわけ次のことを忘れていたのである。国民経済計算が表象する対象は、既にそこにあるもの（デジャ・ラ）ではないのである（コメント3参照）。それは国民経済計算それ自体によって構築されるのである。この意味で、国民経済計算は「客観主義的な」観点を持ち得ない。国民経済計算は経済的な「所与の事実」の集成物ではないのだ。国民経済計算は、「構築主義的な」議論の進め方の上に打ち立てられている。それは、経済的なリアリティ

ーを対象へと構築するのである。...（山田のコメント3：REPRESENT；ここでピリオーは、わざわざMISE EN SCENE [上演する] というフランス語をReprésenterという動詞の言い換えとして付け加えています；これはDarstellen というドイツ語の翻訳と理解され、ピリオーがアルチュセール（フーコーの師匠ですね）の「資本論を読む」の読者であることが分ります）。... ..実際、国民経済計算は、理論的な諸考察と実践的な諸関心の合流点での歴史的生産物なのである。... ..」

From Mitsuru Yamada@???

Fri Feb 14 03:57:08 1997

佐野さんの質問：先ず、質問1「表象・物語り・言説の物質性」というのは、「人間が観念によって>行動してしまうところがあるので、観念が物質的な力をもつ」と理解>していいのでしょうか？

結論からいえば、違うと思います。

言いたかったことは、人間にとって「表象・物語り・言説（この三つの言葉の並べ方、いい加減ですが、気にしないでください；本当は、言説的形成体（ディスカーシブ・フォーメーション）というフーコーの言葉を使えば済むのですが）」は、意のままには作り出し、操作できない存在だということです。我々は、制限はあっても表象・物語りを意のままに作り出し、操作できると考えがちであるけども（例えば、私は、私の物語を作り、そのイメージにしたがって行為を組み立てることができる）、それは次のことを忘れていて、我々が表象を作り出し、物語を語る時、常に既に、我々は一定の歴史的に形成された言説的構成体

Representation 概念について

(表象体系、物語の体系)の場のなかでしか、そうすることができない。われわれが何かを見、聞き、考えるとき、常に、我々に常に既に与えられている一定の表象体系のもと、物語の体系の下で、モノを見たり、聞いたり、考えたりしていません。例えば、「わがはいはばかである」という音を聞いたとします。われわれは、そこで「意識することなく」、雑音の中で、その日本語の音の塊を識別するはずで、そして、「は」と「ば」の音の区別をおこない、さらに、「わがはい」「は」「ばか」「である」という音の塊の区分を行っているはずで、これは、自明なことでしょうか？、我々が意識して意のままに自分で行っている行為なのでしょうか？ 違うと思います。それは「日本語圏」という生活の場(言説的形成体の場)に、我々が既に在るという事実を示しているのだと思います。われわれは、その事実を選べません。言いたいことは、我々の外部に、物質性として「日本語の言説的形成体」が存在しており、われわれは、その場に一体となって組み込まれているということです。我々が、できることは、言説の諸要素を組み合わせたり、変形したり、ズラしたりすることだけです。(文学的才能のある人は、「ばか」が「ねこ」の置き換えであることを看取するかもしれませんが、さらに、雑音が激しければ、「ばか」を「ねこ」と聞き違えるかも知れませんね。)

「観念が物質的な力を持つ」のではなく、「観念」が物質的なのです。妙な言い方だけど、「観念は物質的だから、観念では、どうにもならない力を持っている」；その力のことを、物質性、唯物論的力と呼んでいます。

佐野さんの質問：「観念論の独断」というのは、先験的な「真の認識」を主張すること>と理解していいのでしょうか？

佐野さんの考え(理解)に同意します。蜷川統計学は、「真の」認識を歪める諸作用に関しては、あれこれ指摘し、現実歪曲性とか、統計の階級性とか、言い立てますが、現実歪曲作用を「批判的吟味」によって取り除けば、そこに「裸の」真の事実(=認識)が立ち現れてくるといった議論(こういうのを「恐ろしい透明性の神話」と言います)を行いがちですが、現実歪曲を行う諸作用を取り除いても、「裸の、真の」事実など立ち現れません。他の認識作用(表象作用)によって構築された世界が立ち現れるだけです。蜷川統計学には、「統計方法」による「大量」の捉え方の独自性についての言説(理論)を含んでおり(統計による現実反映の「一面性」とか言う論議)、その意味で、統計方法の物質性(=構成的・プロダクティブな力)を認めているのですが、根幹のところ、透明性の神話に戻ってしまうように思われます。

佐野さんの質問：でも「物質」というのも、考えているうちに分からなくなる言葉ですね。どんな定義が可能なのでしょう？

唯物論の定義については、僕は、最晩年のアルチュセールの定義に従います。

「物質」の定義については難しいですね。まず、確認することが必要なのは、「科学的(物理学による)定義」と「哲学的定義」とを区別しなければならないというレーニンの見解に従うことが必要だということでしょうか。その上で、「哲学的定義」としては、次のような物語で僕の考えを説明していきます。「全ての事を知り尽くしていると自称する山田君が、今ここにいる。そして、山田君の前方10メートルには大きな頑強な障害物がある。ところが、全てを知り尽くしている

Representation 概念について

山田君は、僕の前方には障害物など何もないという観念に取りつかれている。山田君は、20メートル前方に進もうと決意し、全速力で駆け出す。ガチーン!!! イテッ! 何だ、これは、どうなってるんだ、べらぼうめえ! 許さん!

「物質・物質性」とは、そんなもんだと思います。科学的活動における実験的検証でも同じ事でしょう。理論と一定の仮説によって、ある出来事が、ある条件下で起きると推測する、理論と仮説に基づいて精密な実験装置を構成し実験を行う。首尾よく結果がでれば、成功、何も起きなかつたり、おかしな事が起きれば、「なんだ。こりゃ、どうなっとるんだ!」。科学研究の対象は物質性を持っているから、こんな事が起きるのでよ。って僕は、考えています。

From 古井戸@???

Fri Feb 14 23:55:07 1997

徳島大の伊藤です。

(古井戸さんからの引用)>#1つ、なんとなく引っかかっていることがあります。「統計は集団を物語る数字である」と言うときの、「物語る」という概念>の方は問題にならないのでしょうか。ア・プリアリには語れない問題がたくさんあるように思われます。

まず、私の解釈から始めます。「物語る」=「反映する」であり、「客観的に存在する」対象たる社会集団があつて、調査によって得られた数字がそれをなんらか反映している。「正しく」反

映しているかどうかは、概念規定や分類の仕方が正しかったかどうか(信頼性の吟味)と実際の調査の技術的なミスはないかどうか(正確性の吟味)をする必要がある。(部門分類あり方と生産の境界は「信頼性の吟味」に入ると思いますが、その一団の数字をどのように配列するかという意味での表彰形式とは別の問題のように思います。

さて、ここからがやっかいなところです。おそらく、山田さんへの質問になるでしょう。山田さんは「ある対象が既にあり、それを見る視点が様々にある」という凡庸な見方は「危ない」議論といわれる。Aさんはある統計を吟味してAさんの立場(抱いている観念)から見て「正しい」反映かどうかを判断するであろうし、BさんはBさんでそうするであろう。これは凡庸な見方である。私の理解では、山田さんは次のような違った見方をするように思います。そもそも統計を対象の反映とみなすのは間違いであり、「理論的な考察(何の?)と実践的な諸関心(誰の?)」の構築物なんだから、「正しい」反映を探しても出てこない。その構築物を生み出させた構造(歴史的物的規定性)こそが明らかにされるべきことである。対象の「正しい」反映は『どこかにありそうでどこにもないもの』。

うーむ、・・・違うなー。山田さんはそんなこと言っていない。山田さんは、「真の認識」を否定しないし、<<科学的実践>>を擁護する立場(ポジション)を強調されるのだから・・・?完全に混乱してきました。凡庸なる見方を支持する(毒されている)私としては、どうもすっきりと山田理論がつかめないのです。勉強し直して、出直します。

From 古井戸@???

Representation 概念について

Fri Feb 14 23:55:09 1997

山田さんの「コメント3」についてちょっとだけ質問させてください。

>ここでピリオドは、わざわざMISE EN SCENE [上演する]というフランス語をReprésenterという動詞の言い換えとして付け加えています；>これはDarstellen というドイツ語の翻訳と理解され、

この言い換えのミソは、

「上演する」という行為が、本来、あらかじめ用意された「もの」を舞台の上にもってきて見せる行為ではない(たとえ「脚本」はあったにせよ)、という所にあると考えてよろしいのでしょうか。

représentationをRobertで引くと「誰かの目の前または精神の前に置く行為」が基本的語意であり(darstellenを独独でひいたらどうなるのでしょうか)、さらに詳述されているいくつかの意味のうち一番関連しそうな所をみると、Le fait de rendre sensible (un objet absent ou un concept) au moyen d'une image, d'une figure, d'un signe, etc.とありました。

「(存在しない対象や概念を)イメージ、図、記号といった手段で意識できるように呼び戻す行為」とでも訳すのでしょうか。(フランス語には全く自信がありません。)

p.s.ピアニストのアルトゥール=ルービンシュタインの語録に「近頃の若いピアニストは、よく練習するが、予め作った『演奏』を観客の前で開陳するだけで、感心しない」とかいうのがあったのを思い出しました。

古井戸 宏通@森林総研

From Mitsuru Yamada@???

Mon Feb 17 07:07:57 1997

たぶん、古井戸さんの考えに「同意します」。でも、この際、以下の幾つかの点について確認しておきます。

représentation, MISE EN SCENEおよびDARSTELLUNG について：(1) 先ず、ドイツ語には、DARSTELLUNG に関連する語句としてVORSTELLUNG という語句があります。語義は、手元の独和辞典を引けば、両者とも「上演(する)・演技(する)・表現(する)」とあり、一見したところ、両者は同じ語義を持つように見えます。しかし、それは「そう見える」に過ぎないように思われます。これは重要なことですが、両者の意味には次のような差異があるからです。第一に、VORSTELLUNG には、「表象(する)；思い浮かべさせる」という意味があるのにたいし、DARSTELLUNG には、言葉を厳密に理解すれば、無いということ、第二に、DARSTELLUNG には、「叙述(する)」という意味があるほか、化学の用語として「析出(する)・抽出(する)・遊離(させる)」という意味があるが、VORSTELLUNG には、それらの意味は無いことです。この意味の差は、両者とも「上演・表現」という同じ日本語の語句に置き換えられているけれども、この「上演・表現」という同じ言葉が実は違う意味作用を持っているのではないかという疑問を抱かせます。

Representation 概念について

ここで、古井戸さんが、ルービンシュタインへの言及を交えながら、MISE EN SCENE (DARSTELLUNG)は「あらかじめ用意された「もの」を舞台の上にもって来て見せる行為」ではないものとしての「上演・表現」を意味すると推測するのは、「正しい」と思います。

VORSTELLUNGの根幹にある意味は、完全な形で既に存在しているモノを見えるような形にして前に(眼前に)持ち出す(=示す)ということです。ここには、「背後にあるモノ」と「それを(たんに)表現するモノ」という関係が、言い換えると、「表現されるモノ」と「それを代理して表現するモノ」という二項対立に基づいた関係が想定されています。鏡(あるいは写真)による反映というイメージが成立するのは、VORSTELLUNGの意味の場においてです。もちろん、鏡が歪んでいることもあるでしょうが、歪んだ鏡の向こうに「映し出されるモノ」が完全な形であり、「正しく」映し出されるのを待っているというイメージが成立していることには変わりありません。このことは、鏡の置き方や照明のあて方によって「正しい」鏡像は様々あり、「正しさ」は観点に相対的であるといった論議を持ってきて同じです。ところがDARSTELLUNGには、こうしたイメージはありません。「表現(叙述・提示)するモノ」の背後に「表現されるモノ」は存在していない。「表現されるモノ」は、「表現するモノ」と共にある。あるいは、「表現されるモノ」は「表現するモノ」としてのみ存在する。というイメージがDARSTELLUNGのイメージです。「析出・抽出・遊離」という訳が当てられる化学の例でも、例えば、金鉱石に含まれる金を「析出・遊離」し、ここに差し出し、示すというイメージは、背後にあるモノとそれを映し出すモノというイメージとは違います。金鉱石に含まれる金を遊離し、取り出し、提示するという過程がDARSTELLUNGの過程であり、この過程の成果が金として示されるのです。

ところで、厄介なのは、日本語と同様、フランス語でもドイツ語にあるような(DARSTELLUNG

とVORSTELLUNGといった)意味の区別はなく、représentationという語句で両者が訳されているということです。DARSTELLUNGの訳語としてMISE EN SCENEを追加しているのは、この両者の違いを喚起するためなのです。

(2) DARSTELLUNGという言葉を経験論上の鍵概念として仕上げ、提示したのはアルチュセール(1965~66年度のパリ・ユルム街・高等師範学校での「資本論を読むゼミナール」)ですが、その背景に二つの事柄を確認できます。一つは、この経験論上の鍵概念はフロイトの精神分析から由来しているということです。前年(1964年)にアルチュセールは、パリ高師に精神分析の大家ラカンを招きゼミナールを開かせていますが、フロイトの著述(僕がドイツ語のテキストで確認したところでは、特に「夢判断」に顕著だったように記憶しています)におけるDARSTELLUNGという概念の働きについて徹底的な解明がなされているのです。フロイトにおける夢表現(夢のテキスト)は、まさにDARSTELLUNGなのです(実際に幾つかの箇所、この言葉が当てられていたように記憶しています; フランス語訳では、représentationが当てられています)。フロイトにとって夢は無意識の表現ですが、「無意識」は夢表現(夢のテキスト)から離れて背後のどこかに存在している訳ではない(無意識は、例えば、「夢」のような表現の中に効果=作用としてしか存在しえない)。もう一つは、この経験論上の鍵概念は、アルチュセールにおいては、マルクスの名前に結びついて語られる理論上の一大変換(因果性概念における革命)を説明する叙述のなかで明示的に語られているということです(マルクスをヘーゲルではなく、スピノザの継承者として位置づけるという今日の哲学研究の方向を決めた見解の提示と結びつけて; 神即自然、神即無限というスピノザの汎神論/唯物論; 神=原因、自然=結果)。幸いなことに、アルチュセールらの「資本論を読む」の初版本の日本語訳が「ちくま学芸文庫」から出版されているので(全三巻本;

Representation 概念について

現在二巻まで刊行)、アルチュセールほか著「資本論を読む 中」ちくま学芸文庫、の240ページ以降、とくに252ページ以降を参照願います。

なお、DARSTELLUNG (上演) に係わる演劇論として; アルチュセール「ピッコロ」、ベルトラッチとブレヒト」(アルチュセール「マルクスのために」平凡社ライブラリー[文庫本です]所収) があります。

From Mitsuru Yamada@???

Mon Mar 10 05:03:42 1997

「上演Darstellung」概念にひっかけてチョット別
の話題から問題に迫ってみます。例によって言葉
遊びの「哲学ゲーム」です。

新宮一成氏(京都大学)の「ラカンの精神分析」
(講談社現代新書)という啓蒙書(これは、良い
本です)を斜め読みしていたら、次のような一節
に出会いました:

「精神分析とは、人間という動物の欲望が、<他
者の欲望>によって人間化される過程を再現する
場である。」(p.77)

*ここで「再現する場」の、「再現する」は
representというよりは、dar stellenだと思いま

す。1970年代の中頃、英国の一部の社会学者
の間で流行った言葉遊びにre presentを
representとre-present(re + present)、そして
presentという言葉に意識的に分割し使い分けな
がら、(かつ、意識的に区分を曖昧にしながら)
三者の間を行き来しながら現代文化(イデオロギ
ー)の諸相を論じたり、政治的な代表制(例え
ば、労働党は労働者階級を代表する政党であるか
どうかといった論議)について論じたりするとい
うのがありました。正統的な学問の伝統(?)か
らみれば言語道断のこうした「言語ゲーム」を正
統的な学問の鼻先で戯れてみせることで彼らは、正
統的な学問や世間の常識が前提としてきた約束事
の世界を覆して見せ、マテリアルな現実の世界を
露呈させ、伝統的なものの見方・考え方に反省を
迫った訳です。「王様は裸だ」ということを露呈
させるためには、「高度な・アクロバティック
な」言語の戦略、言い換えれば言語のバトル(闘
争)が必要だということです(現実を直視し、歪
ない鏡に写して見れば良いのだというのは「凡庸
な経験論者」の幻想に過ぎない)。80年代以降、
新古典派の経済学者のなかから「経済学はレト
リックだ」という考え方が出てきていますが、そ
れもこの延長線上で可能になった発言でしょう。

**ところで、「再現する」re-presentは、確かに、
presentしているモノを再び(re)プレゼント
(present)することですが、present(現存=現
在)しているモノがプレゼント(現在=提示)さ
れるのはre-presentされることを通してのみだ
ということを理解することが必要です。re-present
される過程を抜きにしては、presentしているモ
ノはpresent(現存)しないということです。例
えば、「労働党が労働者階級を代表している」と
いう言表(=言語表現)を考えれば、これは「労
働者階級」という存在がpresentしており、その
presentしているモノの利害・関心・意思を「労
働党」がpresent=represent=代表している(お
好みなら「反映している」と解釈されますが、
これは凡庸な考え方である。なぜなら、「ある政

Representation 概念について

党・団体・制度的勢力」が「ある社会的集団」を「社会集団」として組織し、彼らの利害・関心・意思に形を与え(= articulateし)、彼らを「制度化された社会的勢力」として形成する歴史的・社会的過程を抜きにしては、「労働者階級」は presentしないからです。もっと言えば、「ある社会的集団」の presentすら、「ある政党・団体・制度的勢力」による領域区画化・組織化の働きなしに presentしないとまで言うことができます。(ここで、「ある政党・団体・制度的勢力」の present 事態の説明についてはどうなのかという問があれば、それは「卵が先か、鶏が先か」という問と同じ誤った問(= 存在しない問)を立てていると言って良いでしょう。)

***たしかに、presentするモノは presentする過程に先立って presentしていると言うことができます。金鉱石に金が含まれていなければ純金を析出(dar stellen)することはできないのだから。しかし、ここで決定的に重要なことは、dar stellenする過程なしに純金は presentしないということです。宝石店に present(ation)してある純金を見ているぶんには dar stellenの過程は隠されているけども、純金を presentさせるのは dar stellen = re-present(の過程)なのです。この意味で、蜷川統計学が信奉している反映論的認識論(典型的な観念論哲学)は「結果と原因を取り違えている」(ニーチェ)。

この論議にひっかけて「命題の真偽問題」がでてくることに気がつくはず。相対主義の泥沼にはまりこむことなく、「(科学的)真理」について論じること...

(このところが難しいとこなんですね！)

****科学の実験過程を例にとれば、ある一定の「科学的」理論と仮説の下で、ある観測条件を与えたとき、ある一定の条件の下で、ある現象が起こると推測し、実験装置を構築し実験する、その結果、首尾よく推測した事態が起きれば、その推

測をたてた命題は検証されたとする(科学の現場は反証主義ではなく検証主義の確信・信念で動いていると思うのですが、佐野さん如何でしょうか)。この科学の実験過程(科学的実践)で重要なのは、科学的推論を構成するランゲージュ(言語活動)とそれに不可分に連結した(articulate)した実験の進行なのであって、結果として生じる事象は、たしかに実験に先立って presentしていると言うことができても、実験の総過程(dar stellen)なしに presentしないということです。

ここで話題を変え、先の引用文の解説をしておきます：「精神分析とは、人間という動物の欲望が、<他者の欲望>によって人間化される過程を再現する場である。」(p.77)

****上篇文章で、「<他者の欲望>によって」とあるのは、「社会関係の網の目に取り込まれ、組み込まれることによって」というふうに読むと僕ら社会科学系の人間には分りやすいと思いません。解説すれば：「人間」は「人間」になるために、まず、自身が「人間でないもの」と区別されたもの(=人間の仲間)であることを認める必要がある(人間に育てられたアヒルは「自分を人間の仲間だと思い込んでいる」などと言われます)。しかし、これは危うい状態だ。そこで、次に、人間であるためには、自身が人間の仲間であることをお互いの関係の中で絶えず確認しあえるような関係が必要である。このような関係の最も源基的な形態は、「私(子供)-あなた(母)-彼(父親)」の文法的主語の三角関係である。動物としての人間の子供は、「私-あなた-彼」の三角関係の中の「私」という場所に自らを置き、組み込まれることによって人間の仲間として自らを「主体化」する(私は私である；このことは、

Representation 概念について

私があなただけでないことを彼が認めていることから明らかだ)。ここで「主体化」は関係への「服属化」である(英語でもフランス語でも主体という言葉の裏側には服属という意味がくっついてい)。ここでの彼は、街角の「警察官」が怪しい人物に呼びかける「おいこら、そこのお前」(「えっ、俺のことか」と、その呼びかけられた人物は思う)と言うところの彼(警察官)でもある。アルチュセールがイデオロギー装置と読んだのはこの過程を支える仕組みのことでした(凡庸な政治的言語としてのイデオロギーとは違います)。

*****一昨年の北海道での総会報告のときに配布したペーパーで、私が「出入国管理制度・外国人登録制度は(国家)のイデオロギー装置としての機能を果たしている」と書いたのはこの意味からです。「外国人を外国人として呼びかけ・呼び止め、外国人として主体化する装置(この国の中で、お前は外国人なのであり、外国人としての振る舞いをしなければならない)。

*****同様な意味で、統計調査(典型的には、人口センサス)は国家のイデオロギー装置としての機能をもっている。人口センサスは、国家の行政的権力が及ぶ外延的・内包的領域(内包的とは、例えばラテンアメリカのある種の国々では、都市のスラムや山岳部の地域の一部は国家の行政的権力が及ぶ範囲外にある)を確定すると共に、そこに在住する人々を国民として、あるいは外国人として、さらにあるファミリーないし世帯の一員として「呼びかけ、国民として、外国人として主体化する」装置だからです。そして、ペルーの1990年(?)人口センサスが明らかにしたように(調査時点での事実上の外出禁止令を公布したなかで、軍隊・警察を総動員した家宅捜査的状况の中での調査の実施)、イデオロギー装置の背後には国家の荒ぶる力の行使が控えている。平時には、決して現れない隠された状況。私は、良い悪いを言っているわけではありません。

From 佐野@???

Mon Mar 10 23:34:20 1997

佐野@福井です。

> 今日、代わりに、「上演Darstellung」概念にひっかけてチョット別の話題から問題に迫ってみます。例によって言葉遊びの「哲学ゲーム」です。・・・中略・・・

> 「言語ゲーム」を正統的学問の鼻先で戯れてみせることで彼らは、正統的な学問や世間の常識が前提としてきた約束事の世界を覆して見せ、マテリアルな現実の世界を露呈させ、伝統的なものの見方・考え方に反省を迫った訳です。

「現実の世界」は人前に露呈しがたいと考える自称・不可知論者の私には、遊びは遊びとしか思えないのですが、どの遊びが面白いかが問題であつて。

> ***たしかに、presentするモノはpresentする過程に先立ってpresentしていると言うことができます。金鉱石に金が含まれていなければ純金を析出(dar stellen)することはできないのだから。しかし、ここで決定的に重要なことは、dar stellenする過程なしに純金はpresentしないということです。宝石店にpresent(ation)してある純金を見ているぶんにはdar stellenの過程は隠されているけども、純金をpresentさせるのはdar stellen = re-present(の過程)なのです。この意味で、蜷川統計学が信奉している反映論的認識論(典型的な観念論哲学)は「結果と原因を取

Representation 概念について

り違えている」(ニーチェ)。

げげっ! 「唯物論はあるが弁証法はない」という内海先生の蜷川解釈を真っ向から否定するとは言語道断。ちゃぶ台をひっくり返す(パラダイムチェンジ)ようなものですね。でも面白いから応援しますが。

> ****科学の実験過程を例にとれば、ある一定の「科学的」理論と仮説の下で、ある観測条件を与えたとき、ある一定の条件の下で、ある現象が起こると推測し、実験装置を構築し実験する、その結果、首尾よく推測した事態が起きれば、その推測をたてた命題は検証されたとする(科学の現場は反証主義ではなく検証主義の確信・信念で動いていると思うのですが、佐野さん如何でしょうか)。

反証主義というのはもちろん「タテマエ」です。社会科学の方法としての統計学を考える基準の一つにすぎません。実験をやってる人たちにとっては、再現性が重要だろうと思います。だから検証主義と言えるかもしれませんね。

> ここで話題を変え、先の引用文の解説をしておきます: 「精神分析とは、人間という動物の欲望が、<他者の欲望>によって人間化される過程を再現する場である。」(p.77)

> -----

> *****上の文章で、「<他者の欲望>によって」とあるのは、「社会関係の網の目に取り込まれ、組み込まれることによって」というふうに読むと僕ら社会科学系の人間には分りやすいと思います。

わかりやすいですが、<他者の欲望>をこんな風に翻訳して間違いはないのですか?

> 自身が人間の仲間であることをお互いの関係の中で絶えず確認しあえるような関係が必要である。

人間であることを一度確認してしまえば、平時には再確認する必要はないのでは? 有事には、自分が人間であることを再確認する必要に迫られることが多々あるのでしょうか、「有事とは何か?」という問題ですね。

> アルチュセールがイデオロギー装置と読んだのはこの過程を支える仕組みのこと

イデオロギー装置は有事の必要条件かな。

From ???@???

Tue Mar 11 03:49:12 1997

At 8:18 3/10/97,

金子治平 wrote:

> ちょっと私の仕事に関係ありそうなので、フォローします。この議論は、結構古くから見られます。

Representation 概念について

> イギリスの人口センサスの初期にも、イデオロギーとして認識しているかどうかは別として「人口センサスによってイギリス人になった」ような意味の投書が新聞に見られますし、日本でも高野岩三郎が「日本人」としての国勢調査参加を呼びかけています。また、私の記憶があいまいですが、上杉先生の著作では、植民地（台湾）における国勢調査のイデオロギー的な側面を強調していたと思います。最近では、歴史学や社会学の人が「日本人論」として興味を持っており、多分、神戸市立大学の富山一郎君（歴史社会学）が取り扱ったはずです。（著作は読んでいませんが、数年前に高野の論文などについて聞かれましたので）以上。

*英国の例は、全く知りませんでした。他は金子さんのおっしゃるとおりです。アメリカ合州国の人口センサスに関してはアメリカ合州国の歴史学者が立派な本を書いています。英国についてもあるのでしょうか。

**上杉先生の国勢調査（人口センサスの歴史論）については、学生のころ上杉先生のゼミナールで上杉先生の「経済学と統計」所収の国勢調査論（第一回国調についての文章）を読んだときに、国勢調査の「イデオロギー的機能」について上杉先生に教えられました。先生の教えに、「それはアルチュセールのイデオロギー論を使えば、上手く説明できる」と生意気に発言した思い出があります（1974～75年の頃だと思います）。先生は、楽しそうな顔をしていましたが、その構想は果たされずに終わってしまいました。僕は、もう勉強する気はないので、今後もやりませんが。上杉先生、御免なさい。金子さん、お願いします。

***1980年の国勢調査の時だったと思いますが、国勢調査反対論が「市民運動」として噴出し、問

題になったと思いますが、その反対論の論点はプライバシー問題だけではなく、「国勢調査は国家による国民統合の装置だ」という（極左的）反対論があったと思います。例えば、大坂に「人民新聞」という中国派の新聞が当時あって、そこではそういう主張が展開されていたように記憶しています；まあ、そんな極端な例を持ち出すまでもなく、同様な見解は沢山あったと思います。他方、我が経済統計学会（当時は経済統計研究会）のほうは、プライバシー問題には理解を示しつつ、「国民統合の装置論」には全く理解を示さなかったように感じています。「国勢調査反対だと、こら、お前、何を馬鹿なことを言ってるんだ」というのが、経済統計研究会の雰囲気。この問題には、立ち入らないことにしましょう。デモクラシーの過程論を抜きにして、国勢調査はデータがいっぱい得られるから良いのだといった論議の流れにならないことを祈っています。ちなみに、僕は国調は「そういうものだ（イデオロギー装置）」と納得しつつ、調査に協力していますけど。

****歴史学の「国民形成論」は、全て共通する問題意識をもっていますよね。

From Mitsuru Yamada@???

Tue Mar 11 03:49:15 1997

いわゆる「反映論」「統計の対象反映性論」が行っていることは、結局のところ聖書（パイブル；大文字の本ですね）に照らしてモノを見ると

Representation 概念について

ということ、聖書に照らして「あるモノ（例えば失業統計）」を検診し、あそこが悪い、ここが悪いと知っているだけなのです。ここで聖書とは、現実を歪み無く反映しているテキスト（=正しい社会科学の理論とそれによって認識された現実像）のことです。偉大なガリレオは、この世界は神が創った、そして神は数学の言語でもって話しており、従ってこの世界は数学の言語でもって書かれた書物（バイブル）である、だから我々は数学の言語でもってこの世界という書物を読み解くことができる、と言いましたが、この数学を「正しい社会科学の理論」に置き換えれば経済統計研究会の「正しい社会科学の理論に基づく反映論的社会統計学」ができて上がるわけです。こうした経済統計研究会の立場は、「正しい社会科学の理論」が「清く正しく」存在しているときには有効なのですが、今日のように「偶像」が決定的に落ちた時代には全く機能しないばかりか、害悪ばかりをまき散らします。+++僕だって、1930年代のファシズムの時代に生まれ落ちれば、頑強なスターリン主義者として「振舞う」という政治的選択をすることがあると思いますが（そういう人になればよいのですが）、今は、時代が違う。チョット混乱するかもしれないけど、「正しい社会科学の理論」（それは存在するという信念は必要だと思います）を求めて競い合うことは大事だと思いますが、唯一のひとつの理論に収斂していくことには手段を選ばず反対していくことが僕の信念です。時代の状況次第で「頑強な反映論論者になっちゃうぞ」などと臆面も無く言ってしまう僕は、学者として破廉恥モノですね。

At 10:39 3/10/97,

Kazuo Sano wrote:

>> ここで話題を変え、先の引用文の解説をしておきます：「精神分析とは、人間という動物の欲望が、〈他者の欲望〉によって人間化される過程を再現する場である。」（p.77）

>> -----

>> *****上の文章で、「〈他者の欲望〉によって」とあるのは、「社会関係の網の目に取り込まれ、組み込まれることによって」というふうに読むと僕ら社会科学系の人間には分りやすいと思います。

>

> わかりやすいですが、〈他者の欲望〉をこんな風に翻訳して間違いはないのですか？

僕が引用した新宮先生の本には、「ラカンの言う大文字の他者の本質はまず言語である」と書かれていますね。佐野さんの指摘の通り、精神分析やそれに依拠した哲学論議の専門家の人達からは、「お前なんか何も分らんのに黙っている」って言われるに相違ないです。でも彼らの議論ってのは、19世紀末ウィーンで生まれた、ユダヤ教とキリスト教の宗教的神話に結びついた家族神話に関連したような奇妙くてれつなお話から出発し、ラカンなどはそれにコジェーブのヘーゲル論（欲望のゲーム）を化合し、さらに僕などには理解不能の数学的言語まで動員し展開しているお話ですから分らない。そこでとりあえず「分らない所は」すべて脇にどかしてし、インチキ解釈をしてしまったわけです。その解釈は間違っても一向に構わないわけで（このあたり、短大の先生というのは気楽でいいものです）。というか、それ以上の精神分析学の論議を僕は信用していないということです。ぼくの精神分析・ラカン理解は、アルチュセールの記念碑的論文「フロイトとラカン」（1964）に基づくのですが：少なくとも、フロイト＝ラカンの精神分析を（フランクフルト学派とは違った意味で）社会科学の領域の場へと開いたという一点で。Lois Althusser, *Ecrits sur la psychanalyse:Fre ut et Lacan, Le Livre de Poche, 1993* ;

Representation 概念について

Wed Mar 12 02:27:15 1997

At 10:39 3/10/97,

Kazuo Sano wrote:

> イデオロギー装置は有事の必要条件かな。

人間の主体性というのは、「危ういもの」というのが精神分析のテーゼで、常に、自分が何者であるか確認し主体化していないと壊れてしまう危うい存在だと。何処まで本当のことが疑わしいのですが、欧米人は常に「愛してる」と言われ続けたいと不安で不安でしょうがなくなると言いますよね（日本人は、「あ、うん」の呼吸なのだそうです）。

イデオロギー装置は、人間社会がある限り常に至るところに在るということで、有事になると（イデオロギー装置が機能不全に陥ると）人間なら狂気に走り（アイデンティティー喪失）、国家の場合なら正統性の危機が訪れ暴力装置が全面に出てくると・・・。イデオロギー装置というのは、日常ではほとんど気づかれない「エーテル」のような存在だと考えるのですが。

*統計調査の環境悪化などと言われるのは、国家のイデオロギー装置の危機でもあるわけですよ。国家が一度国民化したはずの住民を国民化しにくくなっている；企業を国民企業として掌握しにくくなっている。国家として「人口センサス」を実行できなくなったときは、そのとき「日本国」は終焉を迎えるのでしょうか。その時には、何か、怖いことが起きるような気がします。

From Mitsuru Yamada@???

At 10:28 3/11/97, Kazuo Sano wrote:

>> * 「「現実の世界」は人前に露呈しがたい」（佐野）：マテリアルな力として常に露呈していると思うのですが。「伝統的な意味での認識論」が想定していた認識としては露呈しがたいとしても。

> たしかに私は後者の意味で言いました。そしてマテリアルな力の存在も、否定するつもりはありませんが、これについては何も言えないというのが、不可知論者を自称する所以であります。

前期ウィトゲンシュタインの言葉に「人はこの本（論理哲学論考）の全き意義を、例えば、次のように述べることができよう。そもそも語られ得るものは、明瞭に語られ得る。そして、語り得ないものについては、人は沈黙しなければならない。」というのがありますよね。彼によれば、「語り得ないもの」について語ろうとするところに様々な形而上学・哲学的問題が出てくるのであって、哲学的問題なんて本当はないんだと言うわけです。いま、我々が論議していることは、ウィトゲンシュタインの論議とは全く異なったコンテキストでの論議ですが、一つだけ共通していることが在るように思います。ウィトゲンシュタインの「語り得ぬもの」も、我々の「マテリアルな力」も、共に「どうでもよいモノ・無価値なもの」では全くなく、それどころか、それこそが我々の人生にとって本当は一番大切なことなのだとやっていることです（このあたりのところは、ウィトゲンシュタイン理解の争点になっているのかも知れませんが）。それだからこそ、ウィトゲンシュタインは、あれほどの精神の集中力でもって「語り得るモノの境界」を定めようと努めたんです（その試みの限界線上に「語り得ないモノ」の領域が露呈してくるというわけです）。我々の

Representation 概念について

「マテリアルな力」の露呈に関して言えば、それは「語り得ないモノ」であったとしても、我々に「驚き（の感情）として」「（実験の）失敗の苦い経験として」「精神的・肉体的痛みとして」あるいは「悦びとして」語りかけてくるのだと思います。こうした感情こそが、我々の人生の原動力になると共に、学問研究の・新たな領域への知的挑戦への原動力になるのだと僕は考えています。

At 10:28 3/11/97,

Kazuo Sano wrote:

> 伊藤さんが問題にされているのはここかな？大西さんの「構成説から仮説主義へ」（『「政策科学」と統計的認識論』,p.137-）を読むと、「聖書」も「仮説」の一つであることを明確に自覚する必要があり、そのような「仮説」の意義を積極的に評価すべきであると主張されているようです。この点については、賛成で、面白い仮説がないことこそ問題であると感じています。-----

反映論というのは、「絶対的な参照枠（＝聖書）」を想定しないと成立しないお話なんですね。「聖書」は「仮説」になってしまったら成立しないので；基督教もユダヤ教も崩壊してしまう。だから、大西さんの論議も「反映論」の軌道から外れて宇宙空間上にぶっ飛んで行って欲しいのですが。大西さん、行方不明？

At 10:28 3/11/97,

Kazuo Sano wrote:

>> 「正しい社会科学の理論」（それは存在するという信念は必要だと思います）>

> 存在可能性を否定することはできませんが、やっぱり「正しい」という言葉にひっかかります

ね。「正しい人」の存在と同じような語感があって、そんな人っているのって感じですね。どうも違和感があるんです。

「どうも違和感があるんです。」（佐野）：それは全く正しい懐疑的精神で全く異存ないのですが、ただ人間いつも「正さ」を求めて振舞うことは、やっぱり大切で、そうでなければ「抛り所無き人」となって怖いような気がするのです（自分のアイデンティティーの問題としても、また、社会的には「キチンとした正さ」を僕らが示していかないと「オウム教（狂）まがい」が隙を突いて進出してくるとか．．．）。

それは、ともかく、「正しい社会科学の理論」なんて無いし、あってはならないのだけど、にもかかわらず「正しい理論」を求めてばく進するんだという意気込み・信念がないと「やってられない」のが人間ではないかと思っちゃってるんです。「理屈」として分っちゃいるけど、「止めてくれるな、親父っさん」の気分なんですね（親父っさんは、ロゴスの表徴としてです；東大駒場祭のテーマ「止めてくれるな、お母っさん」など思い出さないでくださいね）。

From ???@???

Tue Mar 18 03:33:09 1997

徳島大の伊藤です。

Representation 概念について

From Mitsuru Yamada@???

現」という本も書いていましたね)。

Tue Mar 18 06:13:48 1997

伊藤(国彦)さん、忙しいときに、どうも有り難うございました。先ず、Ian Hackingの本のタイトルRepresentingをrepr市entationと誤記してしまったので、訂正します：Ian Hacking (1983) Representing and Intervening, Cambridge U.P., Cambridge(GB)です。翻訳は、「表現と介入」産業図書です。

At 19:03 3/17/97,

itok@ias.tokushima-u.ac.jp wrote: >

伊藤A：ハッキングは面白いようですね。さっそく注文します。「国民統合装置論」の議論とのかかわりで、政治学でM.フーコーの権力論や統治論を紹介・適用している方がいます。政治学では、超マイナーな存在らしいのですが。というのも、その一人が私の同僚です。彼らは、統治における統計・統計学の役割にもふれ(フーコーが取り上げている)ていておもしろいです。その参考文献にも、ハッキングはでてきました。

山田のコメント3：たぶん、フーコーとの絡みでできた本は、Ian Hacking(1990)The Taming of Chance, Cambridge U.P.だと思います。統計学史の本ですね。ハッキングは、科学哲学・科学史の重鎮でもありますが、欧米では、有名なフーコリアンですよね。The Foucault Effect (フーコー効果)というタイトルの論文集が出版されていますが、そこにハッキングは、統計学史研究におけるフーコー効果を主題とした論文(統計学史研究方法論にかんする論文)を執筆していますよね。その成果が、The Taming of ...ですね(それに、フーコー絡みで、以前に「確率(論)の出